⑥

◆小 論 文〈B類音楽(音楽学)〉〔前期日程〕 東京学芸大 '01

次の文章を読み，著者の視点を踏まえ，日本を例にして音と音楽について論じなさい。(字数制限なし。1枚で書ききれないときは2枚目を用いること)

音は，音楽の素材として存在するばかりではなく，人々の生活を取りまいて無限に存在している。気候や風土などの自然的条件，文明の発展段階による条件，あるいは社会や文明のしくみの中で生ずる諸条件によって，さまざまな変容をもって音は存在する。その多様な音に対する人間のかかわりは，まさに文化の問題といえよう。

海洋に接して暮らす民族にとっては，波の音は日常的であり，その変化によって海の変化をも聞きわける。一方，砂漠の民は，波の音は未知な世界である。しかし，彼らは砂嵐の音によって，移動すべきか否かを判断する。

知覚する自然の音によって，生命の維持にかかわる場合すらありうるのである。

さらに，音は文明の発展段階にも，大きく深くかかわって存在する。現代の大都会に生活する人間にとっては，電話の音，自動車やジェット機の音など，音を聞くだけで，その発せられた現象や原因までも理解する。だが，このような文明に未経験な人間にとっては，それらの音を理解することはできない。

人間集団を取りまく，これらの自然や生活によって生ずる音は，音楽とは無縁なものであろうか。

(中略)

高い音を好む民族もあれば，低い音を好む文化もある。柔らかくよく響く音を心地良いと感ずるグループもあれば，固く張った音やかすれた音を心地良い響きと感ずる文化もある。この多様な音の感じ方とその意識を，エコロジカルな問題としてとらえ直し，その比較や分析を文化的脈絡の中で考え，音楽に接近しようと試みたいと思っている。

音は文明と深くかかわっているとともに，音に対応する人間の知覚，聴覚は文化的判断の能力にもなる。

動物に共通する器官としての耳は，音を聴く能力をもっている。音を感覚として受け入れる器官が耳であり，人間の耳は音楽や音声，そのほか音の高さ，大きさ，長さ，音色などを判断する。単に音を聴く能力をこえ，自然的条件や歴史的条件などを背景にもった社会的行動という実践を通して，判断の能力になる。それは，まさに文化としての能力である。

たとえば，スリランカ＝セイロン島の中央部森林地帯に，今も狩猟採集を糧として移動をつづけるヴェッダ族は，木の枝の折れる音で動物の種類を判断し，かすかに感ずる羽音でハチの種類をいいあてる。だが，録音した現代文明の音を聴かせると，電話のベル音に顔色を変えて飛びずさり，ガラスの割れる音には，不気味な魔性の音を感ずる。ヒマラヤの国，ネパールの山の民ライやリンブーは，遠くの物音で雪崩れの規模までいい当てるが，波の音にも，新幹線の騒音にも魔性を感ずる。音は単に音として物理的現象に考えることもあるが，それを感ずる人間の知覚や判断は文化の反映と考えることができる。このように音への民族の嗜好は，音楽を成立させる基盤となる。

(藤井知昭『「音楽」以前』より)